



Vol.31

机の上の小さな変革



概念の拡張

こんにちは、菅俊一です。今回は、みなさん自身に既存の概念を少し拡張して捉え直すという体験をしてもらおうと思います。

早速ですが、あなたの家のなかにある物のなかから1つ、「実はこれも、考えようによっては本と呼んでもよいのではないか？」という物を、そう思った理由とあわせて持ってきてください。もしこれを読んでいるのが職場などでしたら、その場にあるもので構いません。

その際、できるだけ紙や印刷物などすでにある本と近い物ではなく、かけ離れたものを選んで強引に結びつけてみてください。たとえば、食べ物やドラッグストアに売っているものなど、最初から既存の本と結びつきにくい状況を設定してから探してもらうと、よりおもしろい結果になるのではないかと思います。



いかがですか？「これを本と呼んでもよいのではないか」という物が選べましたか？実際にみなさんが選んだ物とその理由を聞くことはできませんが、たとえば私は、「お店（コンビニなど）で買うおにぎり」を実は本と呼べるのではないかと選んでみました。

おにぎりは、買うときはどんな具（味）が食べたいかということを意識しながら選んで買うわけですが、具体的な味を実感したり、どこにどんな風に具が入っているのかは食べてみないとわかりません。そんな「大まかに

中身の傾向は事前に掴んでいるが、実際は体験してみるまでわからない」という部分が、本の買い方や、買った後読みながら内容について理解していくプロセスに似ているなと思い選びました。

共通項を探って強引に結びつけてみる

今回やってもらったことを少し抽象的に整理してみると、本のどの特徴に着目するかをまず決めてから、同じ特徴を持つ物を探していくことで、本と物の接点を探ることになります。

まったく関係のない物同士が、あらゆる特徴についてすべて一致することはあり得ませんが、特徴を1つに絞り込むことによってつなげることが可能になりますし、本自体を考えるという意味でも、1つの特徴を軸に別の物と強引に結びつけてみることで、私たち自身が「本」に抱いていた固定観念を緩やかに崩すことができるのではないのでしょうか。

私たちは普段から、様々な「当たり前」を無意識に自分に課しながら物事を捉えています。今回は「本」で体験してもらいましたが、このような形で様々な事物の特別な接点を強引に探ってみることで、物事の概念を拡張することができます。そうした経験をしてもらうことで、実際にみなさんが仕事で取り組まれているプロジェクトにおいても「こんなことまで考えてもいいんだ！」と枠組みを広げる参考にしてもらえればと思います。 ▲

PROFILE 菅 俊一 〈SYUNICHI SUGE〉

コグニティブ・デザイナー。表現研究者。映像作家。多摩美術大学美術学部統合デザイン学科専任講師。1980年東京都生まれ。人間の知覚能力に基づき新しい表現を研究・開発し、様々なメディアを用いて社会に提案している。主な仕事・著書に、NHK Eテレ『2355/0655』、『観察の練習』『ヘンテコノミクス』など。